座談会

労協で働く若者たち

――労働の中に協同を探す――

司　会：内山　哲朗（工学院大学）
古村　伸宏（センター事業団・事務局長）
出席者：菊地　謙（センター事業団・病体事業所）
富満　陽子（センター事業団・東葛事業所）
岡本　章寛（センター事業団・府中事業所）
武市ゆう子（連合会本部・総務）

職に就く

古村　今ＮＰＯの存在が日本の中でもひろがりをみせ、社会的にいっても働くということが価値観の上で変化をみせています。就職先として労協をえらんで２年なり３年という時期を経て振り返ってみた時、「働く」ということをどのように考えたり、希望していたのかということと、当時労働者協同組合について魅力を感じた点などを出していただければと思います。

菊地　ＮＧＯとかＮＰＯに学生時代からすごく興味があり、実生活面でも活動していました。いざ卒業となった時に、それまでやってきたことをどうすれば続けられるのかと考えたが、具体的にいいアイデアがなくてあわてた。当時はバブルの尻尾を残していたが、僕自身は大学を休学してタイに行っていたこともあり、普通の企業で働くことにはどうしても違和感があった。偶然知った事業団に連絡を取り、本部で担当者と話をしたらそのまま内定ということになってしまったのだが、いずれにせよいわゆる「就職」ということをほとんど意識していなかったですね。

今振り返ってもその選択が良かったのか悪かったのかまだよくわからなところがあります。学生時代は非常に貧乏でしたから、「飯が食えればいいや」という位の気持ちだから労働条件云々ということについては何もなかった。事業団が募集を始めた最初の年ですから、何をしているところだかさっぱりわからない、とりあえず入ってみようということでした。一番いいと思ったことは言いたいことが言えるということ、自分たちで一つのものを作るという非常に風通しの良いところ、そういうものがないと自分では続けていけないんではないかとその当時は思っていました。ただ民主主義云々ということを当時から言っていましたが、それには結構反発を感じていました。そんなことが有り得るのか、あれはまゆつばなんじゃないかと書いたレポートが未だに本部に残っているとか、あまり見られたくないんですが、もしそれが本当にできるならばやってみたいと。

富満　私は菊池さんの次の年です。私は、労協が第一志望で、強い希望を持っていました。

内山　哲朗

古村　伸宏

富満　陽子

私は、将来福祉現場で働きたくて、大学で児童の情緒発達障害を専攻し、社会福祉を学びました。現場実習もあり、実際にふれてみると福祉の専門大学というのは数多くあるのに専門家として社会に出ていってない。行政、政策と福祉施設の経営とのはざまに立って、3年が限度でみんな消耗してやめていってしまう、そういう施設の現場とか研究機関にいっても私はなにも出来ないのではという不安の中で事業団に出会った。障害を持った人たちが市と一緒になって廃品回収したものを手で分別してやっている、しかも話し合いをして「徹底民主主義」をやっているという、本当にこれが出来るんだったらここに交わって苦労が感じられたらいいなと思いました。

その志望動機は、現場運営に直接関わることだったので、最初本部総務へ配属されたときには、現場運営の一員となったら自分は何ができるか早く知りたいという気持ちがあり、焦っていた。

労協に入って実感したのは、今までの自分を変えていくには3倍も4倍も努力して必死になっていないと自分がわからなくなるということです。自分の中に偏見みたいなものもあったりして自分の気持ちのままあるということに結構力がいって、自分はどっちへ行くのかを問いつめるのがこわかった。

岡本　僕は1994年に入りました。ちょうどバブルが崩壊して就職がきびしくなりはじめた年です。大学のゼミが事業団運動にも関わっていた柳沢先生の担当でしたが、事業団については名前を聞いていた程度で、協同組合にもぜんぜん関心がなかったし、ましてや労働者協同組合なんて聞いたこともなかったが、とりあえず面接だけ受けようかなと思い受けにいった。それが池袋のプリンスでエスカレーターを昇ってきたらずっと行列で、まさか自分が受けにきたところがこんなに並んでいるとは思ってもみなかったので、これはやっぱりきびしい時代だからかなと思いつつ前にいったら行列の先頭が事業団だった。

入って1年目というのはいやな面やたいへんなことがたくさんあって、なんてとこを紹介してくれたんだろうと思ったこともあった。逆に2年目に入って、やっぱり良いところというのが自分自身なんとなく掴めてきた。そういった意味ではあらためて先生には感謝しています。

武市　岡本さんと同じ年です。労協に出会ったきっかけは学校の掲示板で募集を見たことでした。その時はまだ「中高年雇用福祉事業団（労働者協同組合）」となっていて、私の学校には生協がないこともあり、運動というのはスポーツ以外の運動にはノータッチ、「労働者」とか「組合」とかには拒絶反応さえ示していました。だからこのカッコ付きで書いてあった労働者協同組合がそのうち消えると思っていました（笑い）。だからちょっとみてみようかなぐらいの軽い気持ちでセミナーに

岡本　章寛

武市ゆう子

菊地　謙

参加したんです。たいした野望もなく右へならえ的に受験をして大学に入ったので、入ってからいろんなところを見たいと思い、２年生の時外国に行ってみたら驚いてしまった。日本の生活が浮いた生活というか、「学ぶ」とか「生きる」ということを特に考えなくても過ごせる社会なんだなと思って帰ってきたのです。

ゼミの影響で３年生の夏に子どものためのキャンプにボランティアで参加したところ、そこがたまたまフリースクールだった。３月号の『協同の発見』で松本成一さんがそれについて書いてみえましたが、その話の中にある府中にあるフリースクールでスタッフを２年間やりました。そこがまたかなり刺激的なところで、学校ではなく人の生きる場というか学びの場で非常に奥深いものがありました。学校にいけない、つまはじきをくった子が求めてくるところだから、学校教育以前のところで問題がたくさんあり、今の日本のあらゆる問題が吹き溜まっていました。

私は卒業後の自分の生活空間として、フリースクールで経験したようなお互いを感じあえる環境など、人との距離もそのまま持ち続けたいという思いできたものですから、働くとか労働ということへの意識は弱かったなと思う。とにかく事業団に入ってきた時は、人生とか時間とかを使いこなせる人間に成長しあえる環境をつくっていこうというところに魅力を感じて入りました。

古村　私が入ったのは86年、阪神タイガースが優勝した次の年です。ちょうどカッコづけで労働者協同組合が入った年で、新卒学生をフォーマルに募集した最初の時だと思います。研修会みたいなことで畳に20人くらい座って、ほとんどが歴史の話でヨーロッパの事情が少し出たくらいで、これからどうしていくとか理念などは関係なかった。失業ということについての強烈な思いや、「労働組合運動」とか「闘う」ということをみんなが語って、違和感を持ったというよりはっきり言ってわからなかった。実際に掃除をやるというのは聞いていたけど、わけがわからないまま若いお前が行けと突然言われてはじめていったのが長野の旅館でした。

高校まで野球をずっとやっていたということもあって、大学へ行くとしたら体育しかないと漠然と体育学部にいき、体育学部にいけば教師しかないというわけです。大学は教員採用試験までは、教師というのはこんなにいい仕事なんだ、教員になれ、といって教職を一生懸命になって取らせる。ところが採用試験後、学生部に行くとはなっから否定されるんです。「お前馬鹿か、成績を見てみろ。受かったやつの成績を見せてやろうか」とまで言われる。腹が立った。この前まで教師になれ、こんな素晴らしい仕事はないんだと言ったじゃないかと。その怒りがすごくあってとにかくどんな仕事でもいいから、大学が紹介してくれる

ようなところは絶対いかないと思った。「働くこと」の意味をつきつめることはほとんど考えず、生活するためにとにかく働かなければいけないんだとしか考えていなかった。

やっぱり教師になりたいというのがあったんですね。でもどうもなれそうもないから軌道修正するんだけど、それ以外で働くというイメージはサラリーマンしかない。働くというのはイコールサラリーマンというのが全体的な雰囲気としてあったような気がします。

非営利の組織だとか、少なくとも営利を第一目的にしないなんてことを、俺らの時代に言っている人は少なかった。

働く

内山　みなさんのお話をうかがっていると、共通しているのが労協・事業団への入り方にかなり偶然性が作用しているという点です。もっとも、これは他の一般企業へ入る場合でもそうだろうと思いますが……。ただ、現在の社会のもっとも支配的な労働をめぐる価値観、つまり、いかに好条件で賃金が高いところで働くかということに関して、「働く」とは、どうもそれだけじゃないと考えて非営利・協同を掲げる事業団に関心をもつ、というプロセスを辿ったんじゃないか。その際、若い人たちが、社会の支配的な「ものの考え方」を相対化する、あるいは、自分自身の問題意識からちょっと違ったものに魅かれる、そのもっとも本質的な理由、どのようなプロセスを経て非営利・協同の事業団へ目を向けるようになったのか、この辺がいちばん興味のあるところです。

一般的な言い方をすれば、戦後50年という歴史の経過の中で、それなりに社会が成熟化し、物や金だけに人間がとらわれるという状況は基本的にクリアされ、その先に「人間として働く社会的な意義を何か求めたい」という真っ当な欲求が生まれる段階に社会全体が近づいてきている。その一つの反映として若い人たちほどそういう考え方に立とうとしているのかなと思います。

さて、若い人たちが出発時にそれなりに「仕事への思い」を抱いて事業団へ入ってくるわけですが、何年か経つうちに辞めていく人がいるのも事実だろうと思います。若い人が辞めることについて、個人的な事情も当然あるだろうと思うのですが、最初に抱く「仕事への思い」をどのようにして労協組織全体として育てて行けばいいのか、みなさんの経験の中で、労協組織としてこういうものがもっとあればその人たちももっと活かされたんじゃないかとか、なにか気づいたことがあれば出してみて下さい。

武市　私は本部にずっといるので誰が辞めるかというのがわりと早く耳に入る状況で、随分の人がいろいろな思いをもって去っていったのを感じる機会がありました。若い人に関しては、特に同期に関しては話を聞く機会が度々あり、本当はいろいろな色を持っているけどあまり表に出していないと感じたことがあります。

みんなの話を聞いて思ったのが、すごく結論を早く出そうとする人が多いなって。でもそういう選択を迫られる現実があったんだろうし、それは私にはどうこういえないが、組織としてのフォローももっと必要かもしれない。

すごく頑張っていて、労協について熱く語っていた人がふっと辞めてゆくのは、本当にもったいない。皆現場でめげたというより、まだ発展途上の組織の中で消耗してしまっているような気がする。

私自身が続けているという理由は、単純に社会とか組織の中で働くというところで、もっと続けないとだめなんじゃないかと真面目に思っているところがあります。とにかくがむしゃらに頑張るしかないなという思いだけで2年目が終わっちゃった、という感じです。

岡本　実は楽しいことって常にそこらへんに転がっているんじゃないかって最近思う。友達が仕事

が楽しくないって言う、楽しくないから5時が過ぎてからの話が中心になるけれども、果たして人生それで楽しいんだろうかって思う。

確かに今やっていることってたいへんだし体力的にもきつい部分もあるけど、入って2年目で、一般企業で出来ないようなことを自分たちがやっているんじゃないかと思う。例えばあの人に会いに行こうと思ったら自分でアポとって行ってそこでいろんな話ができる。そういった場面や日常の活動を通じて、うまくいかないことだらけなんだけれども、それでも少しでも組合員がこういうふうに変わっただとか、一緒にこんなことができただとか、逆にそうならないときも、ああこれで変わったら楽しいんじゃないかなと想像する部分がある。そういう楽しさが自分を支えているといえます。

古村　酒を飲むのがいいのか悪いのかわからないが、これまでつくってきた歴史を一生懸命になってみんな酒の場で話すわけです。最初は知らない時代のことをここでもう一回やれということなのか、となかなかなじめない。しかしよく考えてみると組織をつくっていることだけではなくて、物事を作り上げていく時の思い入れだとか、どうエネルギーを結集するかとか、その価値を知ることはすごいエネルギーになった。

この3・4年特に外の人といろいろなことを通じて話す機会が増えたということも反映していると思いますが、他人の人生や生きざまを聞く中で自分自身の社会観というのがずっと育ってきているような気がする。そのことと自分が生きて来た歴史とのかねあいがたぶん社会観というものを形成していっているんだろうと思います。

いずれにしても社会を変えていく主体者にまずなろうという決意がないと結局続かないなという思いが強くある。そういう意味では問題意識だとか、社会に対するおおげさにいえば「怒り」みたいなものが本当の意味でつくられていかないと、腹をすえてやるということにはなかなかいかないんじゃないかと思う。結果的にそれに対する方法論として労協でない場合もあるとは思いますが、仕事を続けるという観点でいうと、社会を変えていくという中に労協を位置づけるということが一番大事な点なんじゃないかと思います。

富満　意見や主観は違って当然なんだけど、遠慮するとか迎合することでなくても、違うという思いを出さなかったり、言葉にしないということは、何も参加することにならないし変えるということになっていかないなあと私は思う。団会議一つ一つもそんなものだと思うし、本部にいてもすごく忙しい中でこれを言ったらちょっと激しくなっちゃうかなということがままあるが、それは組織としての労協であっても、普通に一人の人としてあっても、社会の中で生きていくということは同じようなものだと思う。だから社会を変える主体者というふうに、言葉に強いイメージをあまり持たなくても、私は素朴に素直なままに受けて言葉に出せば通じるんだ、あとは皆で折り合いをつけるものではないかと思います。

変わる

内山　個人の問題と同時に、所属している現場での経験を踏まえながら、仕事を通じて自分がどう変わっていったか、というあたりを出して下さい。

岡本　東京のブロックの若手事務局員が話をする機会があるが、自分の言葉で語ることでその中に入って楽しいと感じ、また、自分の意見をいうことで議論も成り立つ。それは事業所でも同じで、団会議で何度も何度も話し合ううちに、私はこんな風にやっていきたいという場面がでてきたりする。たとえば3ヶ月ほど忙しくて団会議がおろそかになっていたりすると、事業所の雰囲気が元にもどってなんとなく所長まかせになっていたりしていて、自分のかかわりが正直に現れる。自分自身の向かう姿が団全体に映し出されることを痛感しているし、そういう組合員の姿をみていればこ

そ、自分としてやはりこうしていきたいという思いが強くなる。

ただ、自分自身でなんで労協なのか、労協の中で自分がなにをやりたいかはっきりわかっていないところが正直いってあって、組合員と話す場面で、話をしながら自分で形だけしゃべっているなと思うことがある。もっと自分がいろいろ見たり聞いたりして、積極的に関わって実感をつかんでこそ自分の言葉で話せるようになるのだと思うし、3年目の目標としては、自分自身の言葉で問題を提起していくということだと思っています。

内山　前を向いてものを考えているときは、これで十分ということはないでしょうし、いろいろなレベルがあるとは思うのですが、労協で働くことの確信をつかみ、「労協を自分の言葉で語り始める」という時期があったと思います。古村さんの経験を話してくれませんか。

古村　形を変えて来ているが、自分を支えている根本のところに劣等感があると感じています。一つは先ほど話した就職するときの劣等感、もう一つは入ったときの同期にたいする劣等感があり負けたくないという思いがあった。労協というものが1日1日姿形をつくっているんだということは見たり聞いたり実感していたが、どういうやり方が労協らしいかを全国をあげて競って典型を作ろうとしていた時期、それが「自分のことばで労協を語る」始まりだった気がする。人の変化は長い目で見て確信になっていくことであって、他人が変わることが確信になるのではなくて、それをやりとげた、あるいは他人が変わることに気づいた自分に確信が持てていくのではないか。自立と協同が言われ始めた時期に、「協同」よりも「自立」に自分の興味があった。自分の姿にこだわりがあって、そこをどうやって作っていくかということであったが、個人の努力という面だけでは抜けないということがわかり始めた時に、協同ということがなんとなく問題意識に上ってきた。自立と協同の相関関係がなんとなく見え始めた。

具体的なことでいうと、実際にやっている掃除や生協の物流といったなかで組合員と共有していけるのは何かと考えたときに、目の前にある仕事の意味づけや、社会的価値を変えるというところに、組合員と自分との共有する部分を求めていた気がする。清掃といわれる仕事が置かれている状況や、周りの人から見られている印象をどうやったら変えて行けるか、劣等感とも混じって強く感じたし、そこを組合員と話をして、清掃が見られている価値を変えたいという思いがあった。「捨てるゴミの向こうにも人がいる」というキャンペーンと「病院で死ぬということ」の上映運動をやったことがすごく「ものの見方」を変えることとして大きかった。目の前にある仕事が出発点でもあるし、いろいろな葛藤や問題意識があっても帰ってくるところはやはりそこなんだろうと思う。そういう経験を重ねながら自分のやりたいことも形成されていくんだろうと思います。

菊地　なにもないところから仕事を作るという経験をさせてもらったことがすごく自分にとって大きかった。1・2年目は口では労協はと言っていたが実感としてなかった。しかし、言い続けていれば何かの形に結びつくということがようやくわかってきたといえる。組合員の意識ももう一つ先に進もうかという風に変わってきているのも確かだし、自分としては実感がないと理解できないという性格で、岡本君と一緒で1、2年目は悩んで、わからないことは人に聞いてやっと自分の中で見えてきたというところかな。

事務局の仕事なり所長ということでいうと、今はこうでもいつかはこうしたいというものがないと絶対にくじけてしまうというかできないと思う。役割としては組合員の力をどれだけ引き出せるかとか、どういうことをみんなで作れるかということがあるが、最後のところで自分がどうしたいのかを持っていないと、組織として進まないし、何もできないということが実感としてある。職業的にやらなければという以上に、自分が新しいものを作りたいという思いがなければと思う。

『教育』に「若者労働者協同組合への挑戦」を書いたのは去年の11月でしたが、一つには社会全体でみると20代であまりものを言う人がいないん

じゃないかという、別に俺が代わりに言ってやろうということでもないんですが、そのことと、特に事業団の中では中高年パワーが光りすぎているんじゃないかという率直な思いがあって、これだけ若い人が働くようになっているんだから若い人なりの視点からの発言があってもいいし、そういうものを作っていかないと、いずれにしたって高齢者の人だけじゃないというのがあって、結構しんどかったんですが、労協で働くことへの自分なりの思いを書いてみました。

古村　今の世の中で我々がやっていることをとらえるとかなり特殊性があると思う。2年生研修で小林基愛さんが「職業的協同組合人」という話をされたが、その前にそもそも協同組合はわかりずらいものだ。協同組合が生まれる背景にはやはり疎外という問題が前提にある。その中で事務局員を一面指導者と捉えたときに、協同組合が何なのかを追究すればするほどしんどいと思う。協同組合労働と一般の企業労働となにが違うのかといったとき、それぞれのやりがいがあったとしても、わかりにくいことをわかるようにやる難しさを伴っている。出来てないから私は向いていないからやめるんだとか、これが完成した姿だと設定してしまってそこに届かないからと決めつけるのは早計ではないかという話で非常に共感をもてた。

最終的に問われることは、協同組合労働が今の世の中で存在している働き方とどう違うのか、自分にとって「労協で働くこと」がどのような意味をもつのかということに進んでいかなければならないと思います。

内山　若いか中高年であるかを超えて、「労協らしい働き方」という同じ問題に若い人たちもぶつかっていかざるを得ないだろうと思います。年齢にかかわりなく労働者協同組合で働くとき、自分たちが「協同の仕事」を通じて変わりうるのかどうか、また、実践のプロセスの中で「協同の中でこそ人が変わる」とどこまで感じられるのか。さらに、そういう目で現在の労協組織を見直したとき、どうすれば労協を「協同の仕事の場」に一層近づかせることができるのか、そこをみんなの共通の問題意識に高めていくことがいちばん大切だという印象をもってみなさんがたのお話をうかがいました。

社会に必要とされる《よい仕事》をしたい、《よい仕事》を実現するために《全組合員による共感の経営》にチャレンジしたい、このような労働者協同組合のめざす「労協の中に協同を発見する」という働き方は現実の社会ではまだやっと歩み始めたばかりです。私の研究上の問題関心からみても《労働のなかに協同関係を築く実践の試み》はたいへん魅力的なものです。またいつかみなさんで集まって、「労協で働く若者たち」をテーマに第2回の座談会ができるといいですね。次回を見通して、「労協のなかで労働を学び、労協のなかの労働から学ぶ」という考え方に立ち、働きつつ学ぶ積極的な実践をねばり強く続けていくことを最後に確認して、今回はお開きにしたいと思います。お忙しい中、長い時間ご苦労さまでした。